

## 日本語の時制表現と事態認知視点

樋 口 万里子

### 1. はじめに

本稿は、日本語の時制は、英語の場合の様にその基準時が固定的ではなく、基本的に事態との相対的な位置関係を表し、事態の認知主体やその時間的位置についてはもともとコンテキストで補う仕組みになっているものと考えれば、日本語の基本形／タ形という形式の意味機能を包括的かつより自然に説明できるということを示す試みである。

一般に日本語では、ルやウ、マス等で終わる基本形とタで終わる形が時制機能を受け持っていると考えられている<sup>1)</sup>。これらには、英語の時制と似た様な使われ方もあるが、かなり性格の異なるさまざまな使われ方もあり、時制を表わす場合と表さない場合がある等と言われている。とは言うものの、時制とは何かということについての言語一般に当てはまる定義の様なものが存在する訳でもない。そこでここでは取りあえず時制を「動詞の一部を成す形態素が表す、認知主体からみた事態の時間的位置への関り」と緩やかに考えておき、英語の

1) 先行研究では、タは、時制だけでなく、完了、ムード、またはその3つに関係する概念を表すとする見解が一般的である。

(ia) 健康の大切さがつくづくわかった。[過去または完了]

(ib) 病気はもう治った。[完了]

(ic) 昨日は仕事をサボった。[過去]

(id) しめた! あった! よし、買った! さっさと食った、食った。[ムード]

(ie) 尖った鉛筆は凶器にもなる。[単なる状態]

しかし、時制、完了、ムードというそれぞれの概念規定に関し、未だ見解が一致していないことは問題である。発話時基準で説明がつかないものが「完了」と分類されている様に思われる場合も多く、循環論に陥っている傾向にある。ここでは、完了、ムードとされている用例も考慮に入れ、タ形を包括的に扱う。

現在形 / 過去形と日本語の基本形 / タ形を日英の時制表現と呼ぶことにする。

英語の時制は常に話者の発話時を基準としている<sup>2)</sup>。もし発話時を基準として事態の位置を表すものを時制と呼ぶならば、従属節や小説等のテキストでしばしば見られる、(1a, 2a, 3a)の下線部の様な基本形やタ形は、時制を表すとは言えないことになる。

(1a) この間大阪へ帰るときに神戸に寄った。

(1b) When I went back to Osaka the other day, I visited Kobe.

(2a) 昨日は、ジョーが帰る / \*った } 前にロンが来た。

(2b) Yesterday, Ron came before Jo { \*goes / went } home.

(3a) 或日の事でございます。御釈迦様は極楽の蓮池のふちを、独りでぶらぶら御歩きになっていらっしゃいました。池の中に咲いている蓮の花は、みんな玉のようにまっ白で、そのまん中にある金色の蕊からは、何とも云えない好い匂いが、絶間なくあたりへ溢れております。極楽は丁度朝なのでございましょう。 (『蜘蛛の糸』芥川龍之介)

(3b) One day, the Lord Buddha was taking a stroll beside the Lotus Pool in Paradise. The lotus blossoms were the color of precious white jade, and from the golden stamens in their centers an exquisite fragrance wafted into the air. It was morning in Paradise.

2) 英語でも間接話法等の一部の従属節に見られる時制の一致現象等で、しばしば相対テンスと称される場合がある。しかし主節がwill等の法助動詞を含む場合を除けば、伝聞内容の時制が発言動作等を表す動詞の時制に影響を受けるのは、例えば、He said he was illの様に、伝え聞いた発言内容が当てはまる発言時点は発話者から見た過去になるからであり、発話者が責任を持って、現在も当てはまると思っている内容は現在形で表せる。そこには、二人以上の認知主体が関わっている。また、同じ英語の従属節でも関係節の場合は、“時制の一致のルール”の適用を受けず、絶対テンス(つまり発話時基準)となる等と言われているが、それは、話が逆で、要するに英語では全て発話時基準と言ってよい。

(*The Spider's Thread* translated by Dorothy Britton)

(1a, 2a)の従属節の「帰る」の様な時間的に発話時以前に位置する行為を表すには、英語では(1b, 2b)の様に過去を使うが、日本語の場合(1a)の様に基本形を使う場合や、(2a)の様に基本形でなければならない場合がある。日本語の基本形は、ある基準時からみて「その時点での状態」の場合と、英語で言えば will が使われる様な「当該の事態がほぼ確実に未来に位置する」場合に用いられるので、(1a, 2a)の従属節の事態を見ている視点は、発話時以外の所にあるということになる。一般にはこの様な場合、時制基準時が主節時にあると考えられてきた。又、日本語の小説では、一つ又は一続きの情景を描いていると思える場合でも、しばしば基本形やタ形が(3a)の様に交互に現れることがある。この場合発話者と事態の位置関係は一定であるので、英語では(3b)の様に時制も一定でなければならない。即ち、英語の時制選択基準時は発話時に固定されているのに対し、日本語の場合は可動的であると言える。

この様な発話時以外の時制選択基準時も認識されている一方、日本語の時制選択基準時は、基本的にはあくまで発話時に置かれてきた(金田一:1950、太田:1962, 1972, 1973、国広:1967、寺村:1971、有田:1996, etc)。これは、多くの時制研究においては主節やノンフィクションの文章が基本に据えられ、従属節や小説の文章はより特殊なものと考えられてきたためであろう。

しかし、(1a, 2a, 3a)の下線部の現象を特殊なものとするにしろしないにしろ、時制であるとすれば日本語の時制には発話時以外にも選択基準時がありうることになる。となると、それが何故ありうるのか、どの様な仕組みで選択されているのか等ということが問題となるだろう。もし(1a)や(2a)の基本形やタ形を特殊なもの、あるいは時制を表さないものとしても、それでは一体これらの形式は何を表していて、何故時制として機能したりしなかったりするのか、

(1a)や(2a)の場合はどの様に特殊か、等々が疑問として浮かび上がる。日本語が視点の可動性の高い言語であることについては、澤田(1994)をはじめ多くの人々によって指摘がなされてきたが、それらは主として現象の記述や考察にとどまっており、何故可動的でありうるのかというところまで踏み込んでいる研究はこれまでのところ見当たらない。また、日本語の視点は可動的とは言え、どこにあってもいいというものでもない。小説等を除けば主節では、時制は常に発話時を軸として選択されている様にも見える。それは何故だろう。小説で時制選択基準が流動的であることに関しては、工藤(1995)は小説では語り手の発話時というものに意味がないからだと言う。しかし英語では、小説でも時制選択基準は一貫していなければならない、後に述べる様に日本語の小説の中にも流動的なものとそうでないものがあるので、小説というテキストの環境だけが流動性の要因とは言えない。この様に日本語の時制の仕組みや時制表現の意味、特に選択基準時が何故可動的たりえるのか等を説明するには未解決の問題が多々残っている。

本稿で取り組んでみたいのはこの辺りをめぐる疑問の解決である。本稿では、(1a, 2a, 3a)を特殊例とは考えず、それを含めた包括的な形で基本形/タ形が使われる様々な現象をより自然に説明しうる仕組みを明らかにしたい。その上で日英の時制表現を認知言語学的見地から比較し、先行研究における議論を概観しつつ、仮説を検証する。

## 2. 本稿の提案：事態とその認知主体の時間的位置関係における日英対照

従来、小説等の場合を除けば、日本語の時制選択基準時は、基本的に発話時か主節時にあると考えられてきた。これは、例えば次の様な、発話時からみればいずれも過去の行為を表す「帰る」と「帰った」という二つの表現の違いを

捉えようとして、英語の時制を捉える上では不可欠の基準の様なものを導入してみたということであろう。

(4a) このあいだ帰る時に、…。

(4b) このあいだ帰った時に、…。

(4a)や(4b)が(5)の様に過去形の主節に続く場合、三原(1992)は、(5a)の従属節の時制選択基準時は主節時で(5b)の場合は発話時等とする。だが、いずれも主節時と考えても特におかしくはない。そればかりか必ずしも発話時とも主節時とも考える必要もない様にも思える。

(5a) このあいだ帰る時に、友達と会った。

(5b) このあいだ帰った時に、友達と会った。

というのも、主節まで考慮に入れず(4a)や(4b)の様な従属節だけでも、とりあえず事態をイメージすることはできるからである。事態を表したり、イメージしたりすることは事態をどこからかみていることだと考えられる。だとすれば、「帰る」という事態も主節がどうであれどこからかはみているはずである。ということは、この基本形やタ形自体は、発話時か主節時等の一定の時点から事態を見ているというよりは、むしろ事態をどちらの方向からみているかを表しているだけで、そのような相対的位置に主節を導入するための視点を作り出している様に思えるのである。

本稿が提案したいことは、日本語の時制は、そもそも発話時や主節時といった特定の基準時を持つのではなく、事態との相対的な位置に視点を持ってくるものと考えてみてはどうかということである。つまり日本語の時制の意味を記

述するにあたり、固定軸概念を一旦外すということである。(4a)は「帰る」という事態をそれがこれから起きるという時点またはその途中(即ち事態の完了時以前)から眺め、(4b)は終わった事態を眺めていることを表し、時制表現自体は事態を見ている視点の絶対的位置に関してはどちらかといえば無頓着なのではないだろうか。基本形やタ形が関るのは、ある視点と事態の相対的な時間的位置関係だけで、その視点がどこにあるかについては、文脈等で補う仕組みになっているのではないかと考えてみたいのである。

これに対し、英語の時制の意味は、上述した様に、発話者の発話時を抜きにしては語れない。事態を描く発話者が必ず中心にあり、発話時という決った位置からの事態の位置確認を指示するものである。ところが日本語の場合では、先程も見た様に、事態の認知主体の位置は発話時とは限らないというばかりでなく、更に(6a, b)の下線部に見られる様に、事態の認知主体すらも、物語の語り手から何の断りもなく突然登場人物に移っている場合もある。

(6a) 達夫は窓の外をみつめた。雨が窓にあたり、それが雫となって流れおちている。窓から見える風景が白くにこっているようだ。

(常磐新平『風の姿』)

(6b) 男はゆっくり証文をたたんで懐にしまった。そしてちらと若い男に目くばせした。部屋の入口をふさぐように立っていた若い男が、目くばせをうけると懐に手を入れた。

(中略)

「まあ、待ちな」

と作十は言った。いま目の前にいる男たちが、どういう種類の人間かということとはよくわかっていた。

(藤沢周平『贈り物』)

基本形やタ形そのものは、基本的には認知主体が誰であるかや認知主体の絶対

的位置には頓着しないものであるとしてみると、これらの事例は、特殊な例というよりはむしろ日本語の基本形/タ形の特徴が良く現れた例の様に思えてくる。図1は、基本形/タ形が表すのは、認知主体から見て事態が相対的にどの位置またはどちらの方向にあるかということだけだということを示している積りである<sup>3)</sup>。それを英語の時制のイメージを描く図2と比べてみると、英語では視点は必ず絵の真中にある発話者にあり、その固定軸を中心に事態が配置

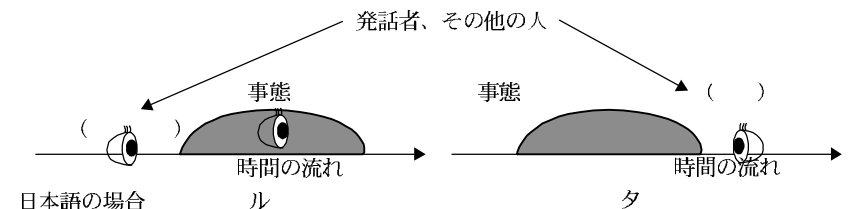


図1

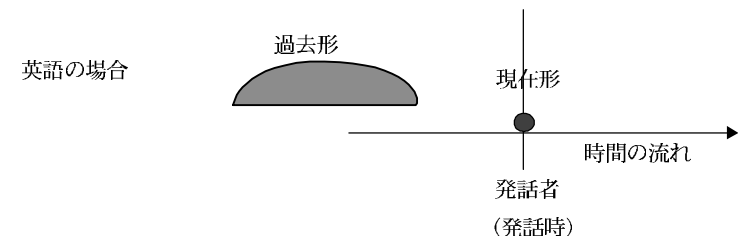


図2

3) 定義にもよるが、こう言うと、タ形/基本形は事態の完了/未完了のイメージを表すとも言えるかもしれない。だが、そうすると今度は完了とは何かということが問題になってくるが、この「完了」という概念にもきちんとした定義はない。そこでここでは、「完了」については、認知主体の位置には無関係に事態が終わったイメージ自体を指すものとしておきたい。完了を表すと言われている「テイル」とタ形の違いについては4.2で触れる。尚、蛇足ながら、呼称は似ているが、認知文法で言うperfective/imperfectiveというアスペクト概念は使用における動詞の表す概念そのものが変化を伴うか伴わないかという区別であるので、完了(perfect)とは全く異なるものである。

されるのに対し、日本語の場合事態の方が描写の中心にあり、認知主体者を表す目玉の上の括弧は空白になっていて相対的位置関係だけがある。これによってこの空白を埋めるべき事態の認知主体が誰でどこにいるかについてはコンテキストによる解釈に委ねられるということを表している積りである。換言すれば、基本形は事態の途中又は事態がこれから起きるという時点に、タ形は事態が終ったものとして見える時点に、認知主体の視点を導くマーカーの様なものと言ってもいい。だから日本語では事態を見る視点が可動的で、事態をいろいろな方向から眺めるのが可能となる様に思われるのである。

では「昨日三宅島で噴火があった」等の通常のノンフィクションの単文または主節の場合等で、時制選択の基準時が通常発話時となるのは何故かという、我々の常識の中に、事態を知覚し描写する主体は、発話時点の発話者なのが普通だということがあるからだと言えるだろう。現実の一つの事態を描写する場合は、発話時以外の基準や発話者以外の認知主体は考えにくい<sup>4)</sup>。一方、複文の場合、主節と従属節とで表されている二つ以上の事態が関るので、複数の認知主体や時点が想定しうる。「Aは『太郎がいる』と言った」では、AとAの『』の発言時、Aの発言を伝える「」の発話者とその発言時が関る。その

4) 英語でも non-modal の主節の内容は、基本的に発話者の現実現在において真であると捉えられているのに対し、例えば (iia) に見られる様に、文主語の内容は話者の判断対象として客観化しうるので、話者にとって真であるとは限らない。従って、英語でも主節と従属節には様々なアсимメトリーがみられる。

(iia) That Yoko signed the contract is completely false.

(iib) [陽子が契約書に署名した]というのは嘘だ。

日本語でも、例えば [陽子が契約書にサインした] だけであれば、発話者はその内容を現実に当てはまっていると見なしていると思われるが、(6b)の様に従属節に入っていると角括弧内の内容は現実に起きたこととは思っていない訳である。また、ここで言っていることは、日本語で「彼は寒い」とは小説等でないかぎりとは言えないということと関連していると思われる。A:「寒い?」B:「うん、寒い。」という会話の事態の認知主体は、Aでは相手、Bでは発話者に決まっているが、英語では He's cold と発話者の判断を表現することができるので、逆に誰または何が寒いかを主語で指定する必要性もでてくる。

際日本語では「いる」という事態は「」の発話者からみてAの発言時である過去に成立っている事態、「」の発話時と同時事態、「」の発話時からみた未来や、Aの発言時である過去から見た未来にある場合等がありうる。それを英語では、それぞれ A said Taro {was/is/will be/would be} there という形で区別する必要があるが、日本語ではこの文だけでは曖昧で、解釈は文脈に委ねられる。また、「明日太郎が来た」が奇妙に感じられるのは「来る」という一つの行為を未来の事として見る「明日」という副詞と、過ぎ去った事として見るタ形がそれぞれ別々の視点を要求するのに、その単文だけでは発話者の現実の発話時という一つの視点しか存在せず、競合してしまうからである。ところが「明日太郎が来たなら、...」となればおかしくない。それは、「なら」によって仮定の世界が導入されることにより、「来る」という事態を成立した後から見る仮定世界の視点と、それを明日の事として現実の発話時から見る視点が共存しうるからだと言えるだろう。また、小説の場合では、物語の中の様々な複雑な時点が考えられ、出来事を眺める認知主体は、語り手である場合も登場人物である場合もある。即ち、日本語の時制選択が発話時を軸としてなされているように見えるのは主節現象だけを見るからであって、基本形/タ形自体は、主節や従属節の別やジャンルを問わず、本質的に認知主体やその時間的絶対位置等を意味の中に必要とはしないように思われる。

そう考えても不思議ではないと思える点もいくつかある。認知文法で捉えられている様に、英語では、発話者からの位置付け (grounding) 機能を持つものは、時制だけではない。それは名詞に不可欠の定性等を表す限定詞にも平行して存在しているものである<sup>5)</sup>。例えば、(7a) では、hand や pocket に対して発話者から見て何らかの位置付け (この場合では発話者から見て三人称に当たる人物のものとしての位置付け) をなす his の類いが不可欠である。

(7a) Ken put his hand into his pocket.

(7b) ケンはポケットに手をつっ込んだ。

それに対し、日本語ではいちいち「彼の」を言語化する必要はなく、言語化するとかえって不自然である。「誰のものか」についてはコンテキストによる解釈に委ねられる性質のものなのである。日本語のシステムでは言葉で名詞に発話者からみた位置付けを行う必要はなく、専ら言語外のコンテキストに基づいて行うものであるとすれば、基本形やタ形が発話時軸からの位置付けを表すものではないと考えてもおかしくはない。冠詞と時制が日本人の二大苦手文法項目とよく言われるのもうなずける。

そもそも日本語のやり取りでは、英語の場合に比べて言葉では明示せず言語外の部分に委ねる度合いが基本的に高いということもある。例えば、英語では、I love you の様に時制のある節では主語や目的語が基本的に不可欠だが、日本語では「愛してる」等の様にコンテキストで明白な場合は欠落するのが普通である。更に、関係節を取ってみても、先行詞が関係節内の主語に当たるのか目的語にあたるかといったことについて、日本語ではかなりの部分をコンテキスト等から補って解釈できるのに対し、英語ではその区別を言語化しなければ表現として成立しない。Matsumoto (1996)も指摘している様に、例えば「[本を買った]学生(が来た)」の場合、学生は、「買う」の動作主である場合や、購入先、または買ってあげた相手である場合等があり得る。それ故、どの解釈が選ばれるかについてはコンテキストで判断される。それに対し、英語ではそれぞれの場合を言葉の方で次の様に明示的に区別する必要がある。従って、時制の

5) Langacker(1991)は、英語の加算名詞/不加算名詞と動詞の perfective/imperfective に見られる平行性も指摘している。日本語の文章を英訳する際に、かなりの部分を訳者の想定で補なって定・不定の位置付けをする必要があるところを見ると、日本語の文章では名詞を ground すること自体を特に意識していないところもある様に思われる。

(8a) The student who bought the book came to me yesterday.

(8b) The student from whom I bought the book came to me yesterday.

(8c) The student for whom I bought the book came to me yesterday.

選択基準時や事態の認知主体についても、英語では表現の中に組み込まれていても、日本語では言語外の要素に委ねられる、と考えるとそうおかしいことではない。

その上、先行研究を読む限り、日本語の時制選択軸が発話時が想定されたこと自体、特に根拠があつてのことでもない様である。金田一(1950)以来の日本語の時制研究の多くは、その時々英語の時制の意味記述を土台としている様に思われる。例えば、タ形の意味にしても、英語で言えば意味的に過去形や完了形で表わされるものが「過去」、「完了」、それ以外の用例が「ムード」等と分類され、しかもそれらの概念を区別する規定は判然としていない。従って日本語のシステム上、時制選択の基準軸が発話時でなければならない理論的根拠も、特には見当たらない。小説以外での主節や単文の場合を言語分析の基本に据えること自体は自然なことなのかもしれないし、その場合日英の時制選択の仕方にある程度共通性がある様に見えるので、時制研究の初期の段階で発話時が前面に浮上したのも、無理からぬことではあろう。しかし、英語の時制のしくみが、認知言語学的な見地からかなり明らかにされつつある現在、日本語の基本形やタ形の本質についての見直しも迫られていると言っていいたい。

### 3. 仮説の検証

#### 3.1 従属節の場合

さて、次にいくつかの具体例と共に最近の先行研究に当たり、本稿の仮説を検証してみたい。

(9a) 後ろからのぞいてみると [ 母が炊いている ] ご飯は(なんと)コシヒカリだった。

(9b) 今から考えてみると [ 母が炊いて { \* いる / いた } ] ご飯はコシヒカリだった。 (澤田：1994)

日英語の関係節の考察として興味深い澤田(1994)が指摘している様に、(9)の角括弧内の関係節の動作は、(9a)では主節の「～だった」という判断行為の時点で進行していると解釈できるので基本形で適格であり、(9b)では現在時を基準として回想した動作なのでタ形の方が自然である。「日本語の時制選択の視点が可動的(澤田：1994：30)」ということについては、このような関係詞節の場合に限らず、既に様々な現象においても指摘されている(牧野：1978：41-48, 安西：1983, 池上：1986等多数)。しかしそのメカニズムについてはというと、未だ不問のままだと言ってよい。

ただ、どういう場合に主節時基準で時制選択がなされるのかについて、現象に何らかの定式化を試みた研究はある。(10)の三原(1992)の視点の原理である。

#### (10) 三原の視点の原理

主節・従属節時制形式が同一時制形式の組み合わせとなる時、従属節時制形式は発話時視点によって決定される。

主節・従属節時制形式が異なる時制形式の組み合わせとなる時、従属節時制形式は主節時視点によって決定される。 (三原：1992：22)

この原理は(11)において「待つことにした」時点から「来る」という事態をみて基本形が選択されている場合等、関係節やコト節を中心とした多くの従属節における時制現象をうまく束ねることができる様に見える。

(11) ビッグマンの前で遅れて来る人を待つことにした。

(10)はまた、次の(12)の下線部(a)が語り手の視点から描かれ、下線部(b)が作中人物の作十の「わかっている」という主節時点での視点から描かれているという解釈とも矛盾しない。

(12=6b) 男はゆっくり証文をたたんで懷にしまった。そしてちらと若い男に目くばせした。(a)部屋の入口をふさぐように立っていた若い男が、目くばせをうけると懷に手を入れた。 (中略)

「まあ、待ちな」

と作十は言った。(b)いま目の前にいる男たちが、どういう種類の人間かということはよくわかっていた。 (藤沢周平『贈り物』)

ただし、(10)で「～時視点で決定される」となっているところは、実際には「その時点からみて選択されているという解釈が可能」という様に考えた方がよいだろう。(11)の場合でも、「待つことにした」時点だけでなく、その後発話時に至るまで待ち続けていて未だ当人が現れていない場合等、発話時からみて「来る」が選択されているという場合もありうるからである。それだけでなく、三原(1992)には主節と従属節で時制形式が異なると何故主節時視点で時制が決まるのか等についての説明はなく、いくつかの疑問も生じる。例えば(13)は異なる時制形式の組み合わせだから、(10)によれば従属節の時制は、主節時視点で決定されているということになる。

(13) 明日忙しいAさんは昨日休みを取った。

この関係節の事態は主節時からみても未来にあるから(10)の反例とまでは行かない。しかし、主節時視点で決定されているとも限らない。(14)を併せてみると分かる様に、時制選択基準時を発話時と考えることもできる。

(14) 明日忙しいAさんと今忙しく働いているBさんは昨日休みをとった。

岩崎(1994)、三宅(1995)、有田(1995)等も、関係節でも非制限的な場合や、理由節、条件節等において、(15)の様に(10)に拘束されない従属節が多々あることを指摘している<sup>6)</sup>。(15a)や(15b)は主節と従属節で異形式だが、基本形の事態は発話時の状態や、主節時に先行するものと考えられ、(15c)(15d)には主節時でも発話時でもない仮想的な時空が想定される。

(15a) 修論を今書いている岩崎さんがその学会で発表した。(三宅：1995)

(15b) あの時あんなやつに会うから、待ち合わせに遅れてしまったんだ。

(岩崎：1994)

(15c) もし明日太郎が来たなら、前もって花子が説得したんだ。(有田：1995)

6) 岩崎(1994)は従属事態先行型として、(iii)や沈(1984)からの引用である(iv)も挙げているが、この例自体の動詞の意味は状態的なので、主節の動作の間にも同時に継続している状態とも考えられる。

(iii) 更に医務室で凄まじい音が続くので、私は起きていってドアを開けてみた。

(岩崎：1994)

(iv) 駅だって言うから飛んで来た。

(沈：1984)

しかし、動作でも主節事態に先行する場合は他にもいろいろある。岩崎(1994)は事態先行型理由節には、va, vbの様に多く「の」が絡むと指摘しているが、vcの様な例もある様に思う。「AするからAした」という表現は「AをするとBが起きる」といった、世の中の物事の因果関係や仕組みをいう言い方が背景にあって「AのせいでBが起きた」という言い方を混じりあった表現ではないかと考えている。そのようなからくりと「の」が結びつきやすいのではないだろうか。

(va) 突然来るんで、驚いたぜ。

(vb) お前が昨日急に勉強なんかするから今日雨が降ったのさ。

(vc) 目の前のカバが気持ち良さ氣にあくびをするから、私も思わずつられた。

(15d) 君が来るなら、聡子も来たかもしれない。(有田：1995)

(16)のコト節も主節と従属節で異形式だから、「いる」は、三原の原理通り気づいた時という主節時と同時の状態または主節時から見て未来の状態としての解釈も可能であるが、発話時の状態や発話時から見て未来の状態の場合も考えられる。

(16) 警察は犯人が福岡にいることに気が付いた。

(17)の「乗せた」は発話時視点の場合(着いた後に自殺した場合)も、主節時点の場合(着く前にタクシー内で自殺した場合)もありうる<sup>7)</sup>。

(17) 自殺した女性を乗せたタクシーは5時頃白崎浜に着いた。

従属節の時制選択が主節時視点でなされるという考え方自体にも疑問が生じる。(10)の原理は主に関係節やコト節に関するもので、三原(1992)は副詞節についてはトキ節の一部に触れているだけであり、従属節全般については今後の課題としているが、例えば(18)の様に従属節が複数の場合の時制選択基準時はどうなるのだろう。

(18) 仕事に出掛ける妻を見送った僕は、幼稚園に子供を迎えに行く前にスーパーで買物して、帰宅後料理に取りかかる前に、この日記を書いて

7) 従属節としては、他にも譲歩節、時節等もあるが、日本語では複文重文の別もはっきりしないので、次の譲歩節は従属節なのかどうか定かでないが、一般論をいって、少なくとも主節時の状態は指さない。

(vi) 母の作るおはぎは大抵おいしいのに、あるとき塩辛かった。



## い{る/た}

従属節と主節の形式が同じか違うかは最後の主節に至るまでわからない訳だから、(10)に従えば、従属の時制形式を決めた視点も、最後の主節に至るまで発話時か主節時かわからないことになる。ところが、おそらく事態を知覚したりイメージしたりするには、事態を捉える何らかの視点が必要なはずである。だとすれば、視点の位置が主節時か発話時かは最後まで保留のまま読み進め、文の最後一括してイメージするということになり、少なくとも聞き手の立場では事態を理解するのはかなり難しい様に思える。また、従属節が複数で基本形とタ形が混交することは、(18)の様によくあることだが、その際仮に視点が発話時になったり主節時になったりと変化するのだとすれば、それについてはどのような説明がつくのだろうか。

またそればかりでなく、主節は省略される場合もある。

(19a) この仕事が立派にできた君なら、{あれもできる/できたよ/...}。

(19b) 電話しないから、..{困る/困った/...}。

更に節の意味機能に目を向けてみると、トキ節というのは、例えば(20)の様に主節を導入するための時点設定をすることが多いと考えられる。

(20) 彼らは米国へ行く時は結婚していたが、帰って来た時は離婚していた。

となると、それなのにここで「行く」という基本形が選択された視点を主節時とするのは話が逆の様で、違和感がある。この場合の基本形は、「行く」という行為がこれから起きるという視点または「行く」という行為全体をカバーす

る視点、つまり米国へ旅立つ前の時点または旅の往路全体の時間イメージによって「結婚している」や「離婚していた」などの主節を導入するための時間設定の機能を担っている様に思えるからである。

これら(18, 19, 20)の例を考えてみても、従属節の事態は、主節の時制形式がどうであれ節ごとにそのつどイメージでき、そのイメージを描いている視点がある様に思われる。それはまた、日本語の時制が固定的な認知主体の位置を必要としないということではないだろうか。基本形は「事態と同時または事態の成立を未来にイメージする時点に」、タ形は「事態の成立を時間的後方に見る時点に」、認知主体の視点を持ってくる機能を有すると考えれば、言語事実にも符合する様に思われる。

## 3.2 小説という談話環境との関り

(21)はある小説の冒頭である。下線部を見ればわかる様に、日本語の小説では基本形とタ形が殆ど交互に出てきても全く自然である。

(21) 六月の、重たく湿った昼下がりがだった。風はなく、澁んだ空気が街から活気を奪っている。額に吹き出た汗を指先でおさえ、笙子は、眉をひそめて歩いていたた。一步踏み出すたびに、靴があたる。足の甲に食い込んでずきずきと痛い。ためしに立ち止まってみたが、痛みはおさまらない。

表通りに出たところで空車を探したが、こんな時に限って、どの車も客を乗せている。パンプスのとがった踵で、地面に線でも引くように足をひきずりながら、笙子はまた歩き始めた。踝から下が熱をもって疼くような鈍痛と、歩を進めるたび、踵や爪先を走り抜けていく刺すような痛みとふた通りがあった。立ち止まると鈍痛が増し、歩き始めると刺す

ような痛みが増す。白い麻のスーツの裏生地が、汗を吸って、背中にべたりと貼りついている。

歩道橋の昇り口の手摺につかまって、笙子は片方の靴を脱いでみた。小指の側面に、大豆粒くらいの水泡ができている。踵の上の皮も剥け、血のまじったリンパ液が、そのあたりのストッキングを丸く汚していた。 - 履き慣れたのを履いてくればよかった。(落合恵子『パラレル』)

小説で時制混交が可能である理由については、前述した様に、工藤(1995)が小説というテキストでは語り手の現実の発話行為の時間や場を意識することがないからということを挙げている。しかし、(21)の基本形/タ形の交替に併せて時制を交替させて英訳することはできないし、英語の小説では時制混交は通常可能でないのだから、単にテキストの性質だけの問題とは言えない。それに、(21)の最初の文のタ形は、語り手の視点で時制が選択されていると言えないこともない。問題は、日本語の小説では何故語り手から作中人物へと何の断りもなく視点が移動できるのかというところにある。英語では小説であっても時制選択基準時が固定的で、時制混交は通常不可能である。それは英語という言葉が、時制に限らず全般的に認知主体や事態をみる時間的位置が言語表現の中で明示的でなければならない度合いが高いからであろう。この点で、コンテキストによる解釈にかなりの部分を委ねることができる日本語とは大きく異なる。日本語では、認知主体が誰であるかやその時間的位置は言葉で指定されていなくても、コンテキストを考慮して解釈することができる。逆に言えば、指定されていないから、コンテキストによって解釈するようにできている様である。

(21)の基本形の全てとタ形の一部の事態(下線部のみの部分)の直接的認知主体は、物語の時間の流れの中で生きている作中人物の笙子である。「一歩踏み出すたびに、靴があたる」や、「痛い。」等は笙子自身の内的感覚の表現であ

り、その認知主体は笙子以外のものではありません。このような日本語の事情もあって、主語が無くても誰が感じていることかは理解することができる。また、認知主体を表す言語手段である主語が介在しないからこそ、笙子と読者の視点が一体化できるにも思われる。認知主体をいちいち言語化しなくていいので、主体から見えた事態や感じた感覚だけを表現することができ、読者が読みながら作り上げるイメージが作中人物の笙子の五感で捉えた主観的世界と同化しやすい<sup>8)</sup>。基本形では同時性やその時の状況、下線部だけのタ形では笙子からみた動作の実現や反事実的世界が描かれ、四角で囲んだタ形ではより客観的な笙子の動きやその場の情景が作者の視点から描かれている。これは、発話時を軸とし認知主体を明示しなければならない英語では成立しない表現のありかただろう。

もっとも日本語の小説にも時制を統一した文体は存在する。登場人物や主人公が語り手という場合には、主人公の発話時というのが意識されることもあり、時制が一定となりやすい。文末にタ形が並ぶことによって、淡々としたリズムを持った客観的な語り口となることを狙った場合もあるだろう<sup>9)</sup>。しかし、野田(1992)の観察によれば、日本語の小説では、過去のことを表すのに基本形/タ形を混ぜて使う文体の方が、タ形だけを使う文体よりはるかに多く用いられている(野田:1992:7(586))。ということは、基本形/タ形の混交は、日本語において可能というよりは寧ろ自然な現象ということになる。

勿論、英語の小説でも、(22)の斜字体部の様な描出話法というものがあり、

8) これは、テレビや映画のカメラが登場人物の眼から見たものを捉えている様に描く手法に似ているように思う。アメリカ映画やテレビでナレーターがある場合は、ナレーターの顔も登場して来る場合が多いが、日本の映画やドラマでは語りはアナウンサーで声だけの出演というのが少なくない。

9) 野田(1992)は、過去の事を言うのに基本的にタ形だけを使う文体は、村上春樹、堀辰雄の『風立ちぬ』、井上靖の『しろばんば』辻邦生の『雲の宴』宮本輝の『夢見通りの人々』等にみられ、基本形も混ざる文体は村上龍や井上ひさし、田辺聖子をはじめ、多くの作家の作品に見られると述べている。

登場人物の物語の時間の視点からの描写が全く不可能という訳ではない。

- (22) I sat on the grass staring at the passers-by. Everybody seemed in a hurry. *Why can't I have something to rush to?* (Quirk et al.: 1985: 1033)

しかしこの手の描出話法は、引用符が省略されている様に感じられるものと考えた方がよく、大江(1982: 34)も指摘している様に今日ではまれである。しかも、(22)の様に地の文の語り手と斜体部分の描出話法の部分の認知主体が同一であったり、時制は地の文のままで人称だけが登場人物視点から選択されていたり、思考が一重の引用符で囲まれていたりする場合等が多い。仮に、時制も指示詞も人称も完全に語り手とは別の作中人物の内面視点から選ばれている例があったとしても、日本語の小説の様に無制限にどこにでも存在するという訳ではない。つまり描出話法ですら、理解の拠り所である語り手の発話時から急に登場人物の物語の或る時点での内面へと何の断りもなく飛ぶことは殆どない。基本的には時制が一定でないと理解できないからである。例えば(22)が“ He sat ... ”で始っていたとしたら、その“ He ”が斜体部分の“ I ”と同一人物という解釈はできないであろう。話者の位置や主語を抜きにしてはものが語れないということは、それが言語のシステムで厳然と要求されているからだろう。逆に言えば、日本語で自由に混交できるのは、日本語の時制にはその様な制約がないからだと言えよう。事態だけを描くことができる、コトが中心の日本語の表現システムでは、主語や事態の認知主体を、コンテキストに依存して埋めることも、あるいはそもそもあまり意識しないことも可能で、潜在化もしやすい

10) 英語の“Where am I?”は、日本語では「ここはどこ？」という表現になり、日本語では見える状況だけを言語化するというあたりに日本語の事態の描き方が象徴的に表れている様に思う。

のではないだろうか<sup>10)</sup>。

この日本語の小説に現れる時制の混交は、(23)の様な「歴史的現在」の生じるテキストでよく起こる時制の混交現象に表面上似ている様に見えるかもしれないが、いわゆる「歴史的現在」とは根本的にメカニズムが異なる。日本語の口語でもよく表れる歴史的現在は、ル形が使われるというだけでなく、多くの場合「のだ[ んだ] (よね)」といった説明を表す語句と共に生じる。

- (23a) 昨日あいつ突然私のとこに来てね。お金貸してくれなんて言うんだよ。

- (23b) 昨日生協で一緒だったんだけどさ、この人ったら定食を2つも平らげるんだよ。その上お金があればもっとたべたいとか言うんだよね。驚いちゃった。

歴史的現在の特徴は、もともとは過去の現実実際に生じた動作として知覚されたものを表現する場合にも基本形を使う点にある。基本形というのは、動作の途中や終了後の状態を表す複合形のテイル形とは異なり、それだけで動作の全体像を表す形である。日本語では、ある程度確実に起きることとみなされていれば未来の事態を表すにも基本形を使うという英語と異なる事情があるが、それ以外では1回の実際に生じた動作の全体というのは、英語の場合と同じく、終わってからしか認識できないのでタ形で表現される。認知主体の視点のある時点と同時の1回の動作を表すには、英語でも単純現在形は使えないのと同じ様に、日本語でも単なる基本形は使えない。動作が現在生じていることを表すには、その途中から表して He's running の様に英語では進行形を取るのと同様、日本語でも「太郎は走っている」の様にテイル形になる必要がある。では、どうして歴史的現在では基本形になるかというと、歴史的現在というのは、過去に起きた動作を直接的に描いているというよりは、あるエピソードがこういう

出来事で構成されているという様な内容の説明をするものだからである (Higuchi : 1999 : 201-206)。まず何が起きて次に何が起こるというエピソードを構成する順序や構成自体は、時間が流れても同じ状態を保っている様に認識できる。その状態は現在もあてはまるものだから、基本形で表すことができるのである。しかし、小説で基本形とタ形が混交するという場合では、(21)の下線部でも見られる様に、動作はやはりタ形で表されており、基本形はその時の状態や、一種の状態である、物事における規則性を表している。小説という談話環境には特殊な部分もあるが、それでも通常は現実の我々の認識のあり方を踏襲するのが普通であり、動作や行為は終って初めてそれとして認識される。また、事態の認知主体を様々な時点の発話者や登場人物として捉えうるのは従属節の場合等と同じであろう。

#### 4. 本稿提案のその他の利点

##### 4.1 「～する前 / ～した後 / ～時」の場合

本稿の提案の利点は他にもある。日本語の時制の意味を、認知主体の事態との相対的位置や方向性を表すとしてみると、「～する前 / ～した後」の様な表現では、「前」の前では必ず基本形であり、「後」の前では必ずタ形となる現象にも説明がつく様に思える。図3を見てみると、基本形は動作がこれから起きることとして表すので「前」としか整合しない。タ形は動作が終わっている時点から動作を見るので「後に」としか馴染まないのである。

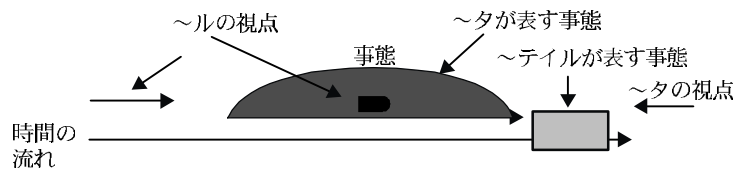


図3

(24a) 姉が{来る / \*来た前}に掃除をした。

(24b) 姉が{\*来る / 来た後}に掃除をするつもりだ。

ただし、「前」の前に3カ月等の期間を表す語句が入ると(25)に示す様になりよくなる。

(25) 父は私が  $\left\{ \begin{array}{l} \text{生まれる} \\ \text{生まれた} \end{array} \right\}$  3カ月前に亡くなりました。

これは何故かという、図4に示す様に、この場合従属節の中に複数の視点を立てうるからではないかと思われる。(25)では、「生まれる」という事態を前

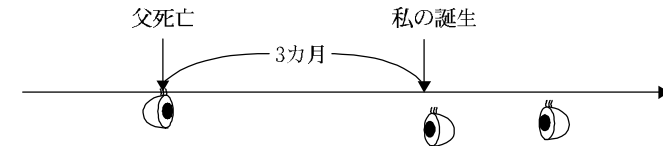


図4

方に見る視点と、その3ヶ月前という父が亡くなる時点が重なるのが普通だから基本形の方がより自然ではある。だが、「生まれた」でもそれ程おかしくはない。それは「3カ月」という期間を表す語句によって、父の死亡時から3カ月という期間を隔てた誕生時が意識されうるので、そこに「生まれる」事態を見る視点を想定することも可能となるからであろう。

##### 4.2 様々なタ、そしてテイルとタの関係

また、本稿で導入した考え方に沿って図3の様にタを捉えてみると、英語で

言えば「過去」にあたる用法(26a)だけでなく、「完了のタ(26b)」や発見を表すムードのタ(26c)等と呼ばれているものも含め、タ形をより包括的に説明することもできそうである。いずれの場合も、事態の成立は認知主体の時間的後方にあるという点で共通しているからである。従来、時制を表すのは(26a)だけで、(26b, c)は時制ではなく完了を表しているという考え方も存在した。だがそれは、時制の性質自体についての考察に基づくものではなかった様に思われる。

(26a) 昨日ウナギを食べた。(過去) cf.彼は今おやつを食べている。

(26b) 昼御飯はもう食べた。(完了) cf.彼は既に昼御飯を済ませている。

(26c) あった！ (ムード：ここでは発見)

更に、図3を使えば、タ形とテイルの関係もよりすっきりさせることができる様に思われる。テイルには、接続する動詞の表す事態の途中に視点があって動作の進行途中を表すタイプ(26a cf.)と、動作の結果に視点があってその状態を表すタイプ(26b cf.)とがある。従来(26b)のタと(26b cf.)のテイルはどちらも完了を表すとされてきた。工藤(1995: 98-146)は、(26a)のタと(26b)のタの違いを 現在と切り離されたもの と、現在と関係付けられたもの という様に説明し、(26b)の様な完了のタと(26b cf.)の様な完了のテイルとの違いを、(26b cf.)は「去年行っている」等の様に出来事時点を示す形式と結びつくが、(26b)タイプは結びつかないという点にあるとする。しかし、(27)の様な例を考えると、(26b)タイプも出来事時点を示す形式と十分結びつく様に思う。

(27a) 彼の怪我の話もう聞いた？ / いや聞いてない / うん、昨日聞いた。

(27b) 彼の怪我の話聞いている？ / いや聞いてない / うん、{\*今朝 / この前から}聞いている。

それどころか、英語の現在完了形では逆に \*I've heard it yesterday 等と出来事時点を示す形式とは共起できない点を見ると、「去年行っている」の「去年」はテイルと結びついているというよりは、「去年行った」という動作全体の結果の状態が今あるという言い方になっていると考えた方がよい様に思われる。更に、工藤は(25b)タイプが出来事時点を示す形式と結びつかない理由について、結びつけられると(26a)のタと見分けがつかず、現在との関係付けができにくいからであると言うが、これは単に(26a)と(26b)のタが基本的には同一物で、英語で言えば単純過去の一部と完了形の表す意味の一部の意味に解釈できる範囲の意味をカバーしていると言ってもよいことを示している。工藤自身も(26a)と(26b)のタの連続性に言及している。また、工藤(1995: 130)は(26b)タイプの例として(28a)の様な例も挙げているが、この「届きました」には(28b)の様に「30分程前に」の様な出来事時点を示す形式が結びつきうるし、過去の出来事に繋がってもよい。

(28a) 先生、邦枝さんから速達でお手紙が届きました。これで最後なのですから、どうぞ読んでください。

(28b) 先生、30分程前に邦枝さんから速達でお手紙が届きました。机の上におきましたよ。これで最後なのですから、どうぞ読んでください。

(工藤: 1995: 130)

これは(26a)と(26b)のタに線引きをすることに余り意味がないことを示している様に思われる。そもそも、我々の通常の発言というのは、全て何らかの意味

で現在の談話の流れに関係している筈である。現在に関係付けられるということと関係付けられないということの峻別はそう単純にはできるものではない。

いずれにせよ、(26b)の様な完了のタと(26b cf.)の様な完了のテイルの違いに関する工藤(1995: 141)の説明は納得のいくものではない。しかし両者を図3の様に捉えれば、共通性は、動詞の表す事態の成立が、認知主体の位置に先行する点にあるとみることができる。違いは、V + テイルでは動作の結果の状態が描写の焦点であるのに対し、タ形では動詞の表す事態そのものに焦点が当たっているという点にあると言えるだろう。

#### 4.3 連体修飾の基本形

最後に(29)の様な連体修飾の基本形についても考えてみると、この場合の基本形を時制と考えようと考えまいと、「～イル」という事態の認知主体の視点は事態の途中にあるということが出来る様に思う。

(29a) そこにいる / た 人に声を{かけた / かけよう}。

(29b) そこで花を売って{いる / いた} 少女に声を{かけてくれ / かけた}。

それぞれにおける「いた」の場合、「発見のタ」にあたる場合や少し間を置いて過去の状態としてみた場合等も考えられるが、それは「いる状態を認識すること」が起きたことや、その過去に位置した状態を表し、いずれにせよ、事態を終ったものとしてみる位置に視点があると考えてよいだろう。

#### 5 . おわりに

以上、本稿では日本語では発話時以外にも時制選択の基準となる視点が何故存在可能で、英語では何故基本的に不可能かという問題に取り組んだ。そして、

日本語の基本形やタ形の意味の中には発話時という軸が必然的なものとしては含まれておらず、基本形は事態をその途中から、またはこれから成立するものとしてイメージさせる意味機能を持ち、タ形は事態を既に成立したものとみる認知視点を導入する働きを持つという様に考えてみてはどうかという提案を行った。同時に先行研究との比較を行いつつ、幾つかの例を通してこの仮説の利点を検証し、日英語の時制の相違を考察した。認知文法が明らかにした英語の時制のメカニズムに照らしてみることによって、日本語の基本形やタ形の意味特性の一面を捉えることができたのではないかと思う。

#### References

- 荒木博之(1994)『日本語が見えると英語も見える』中公新書中央公論社
- 有田節子(1996)「日本語の従属文の時制」九大言語学研究室報告第18号23-32.
- 有田節子(1999)「プロトタイプから見た日本語の条件文」『言語研究』第115巻77-108.
- 安西徹雄(1983)『英語の発想翻訳の立場から』講談社
- 橋本修(1995)「相対基準時節の諸タイプ」『国語学』181集15-28.
- Higuchi, Mariko (1999) "The Role of Functional-Interactive Tools in Describing Tense in English," *English Linguistics*, Vol.16, No.1, 184-209.
- 樋口万里子(2000)「ルノタ、テイルの意味機能試論：認知文法の見地から」九州工業大学情報工学部紀要(人文・社会科学), 12, 37-67.
- 池上嘉彦(1986)「日本語の語りのテキストにおける時制の転換について」日本記号学会編『語り - 文化のナラトロジー』記号学研究6.
- 岩崎卓(1994)「ノデ節、カラ節のテンスについて - 従属節事態後続型のルノデノルカラ - 」『国語学』179集1-12.
- Josephs, Lewis S. (1972) "Tense and Aspect in Japanese Relative Clauses,"

- Language*. 48: 109-33.
- 金田一春彦(1976)「国語動詞の一分類」『日本語動詞のアスペクト』5-61むぎ書房(『言語研究(1950)15号より採録)
- 工藤真由美(1995)『アスペクト・テンス体系とテキスト - 現代日本語の時間の表現』ひつじ書房
- 国廣哲彌(1967)「日英両語テンスについての一考察」『構造的意味論』三省堂43-90.
- Langacker, Ronald W.(1987) *Foundations of Cognitive Grammar. Volume I: Theoretical Prerequisites*. Stanford University Press. Stanford: California.
- (1991)*Foundations of Cognitive Grammar. Volume II: Descriptive Application*. Stanford University Press. Stanford: California.
- Matsumoto, Yoshiko(1996) "Interaction of factors in Construal; Japanese relative Clauses," Shibatani and Thompson(ed.), *Grammatical Constructions*, Oxford, 103-124.
- 三原健一(1992)『時制解釈と統語現象』くろしお出版
- 三宅智宏(1995)「日本語の複合名詞句の構造 - 制限的 / 非制限的連体修飾節をめぐって - 』現代日本語研究』第2号大阪大学現代日本語学講座49-66.
- 中右 実(1994)『認知意味論の原理』大修館書店
- 野田尚史(1992)「テンスから見た日本語の文体」『文化言語学 - その提言と建設 - 』三省堂
- 太田朗(1962)「日英語の比較 - テンスの問題」『全英連第12回大会紀要』
- Oota, Akira(1971/72) "Comparison of English and Japanese, with Special Reference to Tense and Aspect," in *Collectied Writings on the Study and Teaching of English*, Kaitakusha. 193-236.
- (1972/73) "Tense Correlations in English And Japanese," in *Collectied*

- Writings on the Study and Teaching of English*, Kaitakusha. 237-251.
- 尾上圭介(1982)「現代語のテンスとアスペクト」日本語学第一巻第2号、17-29.
- 澤田治美(1993)『視点と主観性 - 日英語助動詞の分析』ひつじ書房
- 澤田治美(1994)「日英語関係節のテンスと話し手の視点」英語青年140-3, 132-134.
- 寺村秀夫(1971)「‘タ’の意味と機能 - アスペクト・テンス・ムードの構文的位置付け」岩倉具視教授退職記念論文集出版後援会編『言語学と日本語問題』くろしお出版(『日本語のシンタックスと意味Ⅱ』付録、313-358.
- くろしお出版(1984))